

# タイの子へ机と椅子



大仙の  
セツト届ける

## 「学びの環境整えたい」

大仙市で社会奉仕活動に取り組み有志が、市内の学校で使われなくなった机と椅子をタイの農村部に贈っている。同市刈和野の会社社長・佐々木正光さん(67)が中心となり、このほど第1陣の328セットを届け続けた。今後も学習用品を贈り続け、学びの環境を整えていく考えだ。

佐々木さんはリサイクル業や食品の輸出などに携わる傍ら、1989年から国際社会奉仕団体の大曲ロータリークラブ(RC)で活動。アジアからの留学生受け入れや車椅子の寄贈などに取り組んでいる。

大仙市から贈られた机と椅子で学ぶタイの子どもたち。後列中央が佐々木さん(8月)(佐々木さん提供)

机と椅子は、2007年に大仙市の学校統合や少子化で使われなくなったものを引き受けた。当初考えていた中国への寄贈は高い関税がかかることから実現せず、新興国の引受先を地道に探していた。

15年からはタイのRC会員が窓口となり、輸出に向けた話が具体化。タイでは都市と地方で学習環境の格差が大きく、机や椅子が全ての児童生徒に行き渡っていない学校が多いという。

今年1月には市内のRC会員やリサイクル業者の団体と共に、積み荷や輸出の手続きを行った。現在、首都バンコクから北約200キロにあるチャイナート県の小中学校、高校計10校で使われている。

佐々木さんは7、8月に計2度タイを訪れ、机と椅子が使われている様子を視察。また、必要な学習用品について聞き取りしたとこ

ろ、鉛筆やノートが足りない学校もあることが分かった。今後も寄贈を続けるため、大仙市教育委員会へ協力を求めている。

「子どもたちが熱心に勉強している姿が印象的だった」と佐々木さん。支援を行った子どもたちの中から、タイと日本を股に掛けビジネスを展開する人材が育つことを期待している。

7月には、積み荷作業を手伝った大曲南RCの会員2人もタイに同行した。元教員の鈴木明美さん(74)大仙市IIは「タイの子どもたちが旗を振って歓迎してくれ、感激した。大仙市には使われていない机などがまだあると思われるので活用を進めたい」、樋口真子さん(66)仙北市IIは「タイの山間部では勉学の環境がまだまだ整っていないと聞いた。地道な活動が大切だと思った」と話した。

(佐藤辰)